

日本体育協会創成期における体育・スポーツと今日的課題
－ 嘉納治五郎の成果と今日的課題－

研究班長 菊 幸一 (筑波大学)
研究班員 真田 久 (筑波大学), 清水 諭 (筑波大学), 友添秀則 (早稲田大学),
永木耕介 (兵庫教育大学), 村田直樹 (財団法人講道館), 山口 香 (筑波大学)
担当研究員 伊藤静夫, 森丘保典 (スポーツ科学研究室)

目 次

はじめに：日本体育協会創成期における体育・スポーツを考えることは、なぜ体育・スポーツの
今日的課題につながるのか (菊)

1. 本研究の動機と目的	3
2. 所謂「嘉納趣意書」と日本体育協会・JOC 百年	4
3. 1 年次の研究課題	5
1. 嘉納による柔術のスタンダード化と海外普及 (永木)	
1-1 緒言	7
1-2 嘉納による柔術のスタンダード化	7
1-3 グローバル・スタンダードへ－イギリスとドイツの事例－	9
1-4 海外普及にみる課題	11
2. 嘉納治五郎の国民体育 (真田)	
2-1 嘉納治五郎の三つの貢献	15
2-2 嘉納の国民体育 (生涯スポーツ) の特徴	16
2-3 今日的課題へのアプローチ	23
3. 嘉納治五郎の「柔道」概念に関する考察 (友添)	
3-1 はじめに	25
3-2 嘉納治五郎と柔道	25
3-3 プレ・モダン (前近代) とモダン (近代)	26
3-4 武術の論理と嘉納の柔道	28
3-5 個人倫理と社会倫理	29
3-6 「カノウイズム」の形成過程	31
3-7 嘉納とカノウイズムの限界	32
3-8 おわりに－今日的課題へのアプローチ	34

4. 日本における体操－体育の展開と嘉納治五郎（清水）	
4-1 嘉納治五郎による大日本体育協会の構想と今日的課題	37
4-2 明治初期における体操と遊戯	38
4-3 道具としての体操：森有礼と兵式体操	39
4-4 永井道明とスウェーデン体操	39
4-5 永井道明に対する嘉納治五郎の体操および身体観	43
4-6 三橋喜久雄をめぐる確執：嘉納治五郎派と永井道明派の対立	49
4-7 どのようにしてこの「国」の身体技法は形成されたのか：嘉納の体育観	50
5. 嘉納治五郎と女子柔道（山口）	
5-1 はじめに	55
5-2 女子柔道の始まり	55
5-3 嘉納の理想と女子柔道	58
5-4 まとめ	61
6. 「嘉納治五郎」を知るための主要文献資料について（村田）	
6-1 基本思想についての関係資料	63
6-2 体育観についての関係資料	63
6-3 大日本体育協会についての関係資料	64
6-4 総覧的資料として	64
おわりに：1年次の研究成果と2年次以降に残された課題（菊）	
1. 1年次の研究成果	65
2. 2年次以降に残された課題	67
資料 会議記録（森丘）	69

はじめに：日本体育協会創成期における体育・スポーツを考えることは、なぜ体育・スポーツの今日的課題につながるのか

菊 幸一（筑波大学）

1. 本研究の動機と目的

日本体育協会は、1911（明治44）年に嘉納治五郎を初代会長として大日本体育協会という名で設立されてから、今年2011年に創立100周年を迎える。もとより、我が国において明治初期から野球、漕艇、陸上競技などの各スポーツ種目は、主に大学の課外活動として積極的に取り入れられ、個別にその歴史を刻んできている。しかし、ここで言う「スポーツ百年」とは、日本のスポーツが当時の大日本体育協会設立を契機として、内外にスポーツの意義と価値をまとめた形で表明し、以後一つの制度として社会に「スポーツ」として存在してきた歴史を指している。

講道館柔道の創始者であった嘉納治五郎は、1909年に日本人初のIOC委員となり、1911年に自ら初代会長として大日本体育協会を設立して、オリンピック大会への参加のみならず、「スポーツによる人間教育」「学校体育の充実」「生涯スポーツ振興」「スポーツによる国際交流」に尽力するなど、我が国の体育・スポーツの礎を築いた始祖であるといえよう。彼は、「精力善用・自他共栄（目的を果たすために最も効力のある方法を用いつつ、それを実生活に活かすことによって、人間と社会の進歩・発展に貢献すること）」という理念を、心身の調和的な発達を求めたヘレニズム思想の展開であるオリंपイズムの発展型として、西洋のスポーツ文化に組み入れることを構想していたとされる。この構想の背景には、当時欧米が中心であったオリंपック（ムーブメント）を世界的な文化にまで昇華することが、オリंपックの価値（卓越、友情、尊敬）の定着、ひいては世界平和の実現につながるという強い信念があったのではないかと考えられている。

したがって、日本体育協会の設立をめぐる創成期とは、単に日本のスポーツがオリंपック大会に出場するために、その参加条件として国内統括団体（NOC）を設立させなければならなかった

時期だという表層的な画期としてのみ理解されるべきではない。確かにそこには、種目別に発展してきた日本のスポーツに対してオリंपック大会参加を契機として、これらを組織的にまとめなければならないという制度的な必要性はあるものの、さらに重要なのは、そのために日本のスポーツをめぐるどのような理念や課題が示され、それがどのような社会的意義や可能性を、そして限界をもったのかを考える画期としてとらえることの必要性である。そのためには、当時の日本をめぐる社会的、文化的状況を十分に踏まえつつ、その歴史的な文脈の中で嘉納治五郎なる人物が、個人としてだけでなく、その当時の歴史社会的な文脈を生きる社会的存在として、我が国の体育やスポーツをどのように考え、何を期待し、何をなそうとしたのかについて明らかにすることが重要であろう。創立100周年を迎える今日に生きる我々であるからこそ、その成果を冷静に分析し、評価して、これからの日本体育協会、JOCをはじめとするスポーツ統括団体や、ひいては日本のスポーツのあり方の参考とすべき今日的課題を析出する大きな手掛かりが得られるのではないかと考えるものである。混迷する社会状況の中で揺れるこれからのスポーツ状況をどのように冷静にビジョン化し、導いていくのかは、いくら過去に優れた業績を上げた人物であれ、「苦しいときの神頼み」ではないが、単純に嘉納個人の言説に依拠しこれにすべてを還元して今日的課題が解決できるほど、ことは単純ではない。そのような依存は、格言のレベルでは説得力をもつであろうが、およそ科学的な取り上げ方とは程遠いスタンスであり、結果として制度的、組織的な構造改革のビジョンを描くところまでには至らないのではなかろうか。

だから、本研究の目的は、嘉納個人の思想や考え方、行動とその成果にのみ焦点を当てて、これらの発掘内容を一方的に礼賛したり、逆に批判し

たりすることではない。あくまで当時の時代的制約の中で生み出された成果を、その時代的文脈の関係それ自体から構造的に説明しつつ、そこから今後100年に向けた我が国の体育やスポーツに対する今日的課題の在り様や特徴を自覚化して、これらを明らかにすることが目的なのである。2011年に創立100周年を迎える日本体育協会が、特に団体名称変更の是非論も起こっているこの時期に、広い視野と優れた洞察をもって我が国のスポーツ振興に寄与した本会創設者である嘉納治五郎の体育観およびスポーツ観を掘り起こしつつ、その成果を今日的な課題から再検討することは、今後100年の未来に向けたグローバルな視点から日本体育協会、あるいはJOCをはじめとする民間スポーツ統括団体等の果たすべき社会的役割や在り方に関する新たな一歩を踏み出す意味でも極めて意義深いテーマであると考えられる。

2. 所謂「嘉納趣意書」と日本体育協会・JOC百年

ところで、大日本体育協会を設立する際、嘉納は「日本体育協会の創立とストックホルムオリンピック大会予選会開催に関する趣意書」（所謂「嘉納趣意書」）を著し、これを日本オリンピック大会予選会長として公表した。そこには、「国家の盛衰は国民精神の消長に因り 国民精神の消長は国民体力の強弱に関係し 国民体力の強弱は其国民たる個人及び団体が特に体育に留意すると否とに依りて岐ることは世の普く知る所に候」との認識が示され、＜国家の盛衰－国民精神の充実－国民体力の向上＞が関連していることから、国民体力の向上に対する担い手である国民一人ひとりの自覚とこれに関係する機関や団体等の責任の重要性を説いている。ところが、「顧みて我国を思ふに 維新以来欧米の文物を採用するに汲々たりしに拘らず独り国民体育の事に至りては殆んど具体的の施設なく 体育の事とし言へば僅かに学校体育の一部たる体操科及び課外に秩序なき運動あるに過ぎず候 従って全国壮丁の体格は年々其弱きを加へ学校卒業者の体格の如き其劣弱なること反て無学者よりも甚しき状況を呈するに至りしもの決して偶然の事には無之候」と、我が国の体育振興の現状を嘆いている。すなわち、国民全般の体育振興については具体的に施設を作る

こともなく、また学校体育でもまだその取り上げ方は十分とはいえない状態で、結果として就学者の方がかえって学校に行っていない者たちよりもかなり劣っていることは偶然ではない、と当時の体育振興の在り方を批判しているのである。そこで、その対策として「確固たる方針に依り体育の普及発達を図るべき一大機関を組織し 都市と村落とに論なく全国の青年をして皆悉く体育の実行に着手せしむるを以て目下の急務なりと存候」と述べ、国民体育の振興のためにはそれを目的とする一大機関が必要であるという当時の課題を明確に指摘しているのである。

所謂「嘉納趣意書」では、「此時に当り」と翌1912年に開催される第5回ストックホルムオリンピック大会に出場することの意義が述べられているが、国民体育振興のための一大機関、すなわち前述した大日本体育協会設立の趣旨との関連については、「我国体育の現状と世界の大大勢とに鑑み 茲に大日本体育協会を組織し 内は以て我国国民体育の発達を図り 外は以て国際オリンピック大会に参加するの計画を立てんことを決議仕り」としか述べられておらず、両者の関係については明確に説明されていない。この点については、嘉納が国民体育の振興をどのように具体的に考え、これとオリンピック大会への出場を契機とする競技スポーツの発展を同一組織内で具体的にどのように結び付け、発展させようとしていたのかを明らかにすることが非常に重要であると考えられる。なぜなら、21世紀における我が国のスポーツ振興の今日的課題は、このような日本体育協会創成期における国民スポーツ振興と競技スポーツ振興の両者の関係性に対する体育・スポーツ界内部の論理が不明確なまま今日に至っても残されていると考えられなくもないからである。

確かに、歴史的には1989（平成元）年にこの両者の機能は、前者を日本体育協会が、後者を日本オリンピック委員会（JOC）がそれぞれ担うものとして分化し、独立している。それは、同じスポーツとは言いながら、これを取り巻く歴史社会的な変化の中でスポーツの高度化と大衆化とがそれぞれ分離・独立して発展していくことを促しているようにもみえる。日本体育協会・JOC100年の歩みの中でこの分離・独立の1/5世紀を、その歴史社会的文脈の違いを踏まえつつも嘉納であれ

ばどのように評価するのか。少なくとも、日本体育協会はおよそその4/5世紀を統一的な組織として国民スポーツの振興と国内オリンピック委員会(NOC)の機能を併せ持ちつつ、大衆スポーツと競技スポーツの両者の振興を図ってきた。このような歴史が長いだけに、日本体育協会創成期における嘉納の国民スポーツ観及び競技スポーツ観とオリンピック大会参加に対する考え方及びその背景にある価値観は、今後のスポーツ組織における統括的な在り方と関連させて議論してみることも重要であろうと考えられる。その際、講道館柔道の創始者として柔道の普及・振興に努めてきた嘉納が、近代スポーツとしての柔道の大衆化と高度化をどのように考え、評価し、国内外の柔道の「発展」をどのように意味づけ、価値づけていたのかを明らかにすることも大いに参照されるべきであろうと思われる。

また、大日本体育協会は、オリンピック大会出場を果たすための組織として「其事に当り常に政府の補助あり主権者の保護あり大会を開くに当りては其国大統領若くは皇太子之れが名誉主掌者たるを以て例となし候」とあるように、当該政府や王室からの補助や保護によって成立すべきものと考えられていた。しかし、当時協力を求めて交渉した文部省からはよい回答が得られず、学生スポーツの中心的機関であった東京大学、早稲田大学、慶應義塾大学、そして嘉納自らが校長を務めていた東京高等師範学校等に呼びかけて寄付金を募った。すなわち、大日本体育協会は、純粋な民間スポーツ組織として、今日風の言い方をすればNGOとして、時の政治や政府の意向とは関係なく設立された経緯をもつのである。この純粋な民間スポーツ組織としての性格は、今日、あるいは21世紀のこれからのスポーツ振興を考えていく上で、これをどのように活かし発展させていくべきかを問いかける重要な今日的課題につながるだろう。まさに私塾としての講道館の創始と重ね合わせ、「民」による組織的立場からスポーツの公共性をどのように発展させていくべきなのかを嘉納から学びつつ、これを日本体育協会・JOCの次なる100年に向けたスポーツ組織としてのビジョン化にどのように結び付け、生かしていくべき

かということも重要な今日的課題となるのである。

3. 1年次の研究課題

以上述べてきたように、本研究の目的は、日本体育協会創成期における体育・スポーツを考えることは、なぜ体育・スポーツの今日的課題につながるのかを問題意識としつつ、大日本体育協会の初代会長である嘉納治五郎の思想や考え方に基づく成果を、彼の生きた歴史社会的状況に照らしながら評価し（もちろんこの評価には、今日的状況からみた限界と可能性が含まれるが）、21世紀の体育・スポーツを推進する日本体育協会やJOCの組織としての、次なる100年に向けた今日的課題を明らかにすることである。

そこで、1年次の研究目的は、これまでの嘉納自身による、または嘉納に対する著作や研究論文等をできるだけ本研究の目的に沿ってレビューし、当時の社会環境および状況等の歴史的な脈を踏まえた上で、その体育観・スポーツ観の本質に迫るべく質的検討を行うこととした。その結果、主に次のような観点から総括レビューを行い、本報告書としてまとめることとした。

- 1) ナショナルスタンダードとしての運動の仕方と国民体育との関係
…嘉納による柔術のスタンダード化と海外普及（永木耕介）
…嘉納治五郎の国民体育（真田久）
- 2) 嘉納の「柔道」概念にみる体育とスポーツ及びその歴史社会的背景
…嘉納治五郎の「柔道」概念に関する考察（友添秀則）
- 3) <体操—体育—国民体育>の系譜におけるネットワークと組織化との関係
…日本における体操—体育の展開と嘉納治五郎（清水論）
- 4) 女子柔道に対する考え方と国民体育との関係
…嘉納治五郎と女子柔道（山口香）
- 5) 嘉納治五郎の成果をめぐる文献
…「嘉納治五郎」を知るための主要文献資料について（村田直樹）